

平成 22 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」
共同利用型公募研究報告書

研究課題：19 世紀後半から 20 世紀初頭のロシア・インテリゲンチアの文学的思
想的系譜——ナロードニキとドストエフスキー

申請者：大山 麻稀子（横浜国立大学・非常勤講師）

本研究の課題は、19 世紀後半の「ナロードニキ作家」や「ナロードニキ思想家」と呼ばれたインテリゲンチアたちによるドストエフスキー批判に焦点を当て、ナロードニキとドストエフスキーの関係、その相互受容の真相を解き明かすことであった。それによって最終的には、その後のロシア文学史、また思想史に大きな痕跡を残し続けることとなる二つの潮流の差異を明らかにし、そこから逆説的な形でナロードニキとドストエフスキーを再照射することを狙いとしている。

1870 年代末から 80 年代初めに渡る、作家ガルシンの書簡内での度々のドストエフスキー批判、同じく 80 年代初頭の思想家ミハイロフスキーによる痛烈なドストエフスキー批判、それと似通った、思想家クロポトキンによる、また思想家ラブローフによるドストエフスキー評、さらに、作家 G. ウスペンスキーによるドストエフスキー批判を、申請者はこれまで追ってきた。ウスペンスキーは興味深くも、ドストエフスキーがそれによって同時代の人々に予言者的作家としてみなされたところの、彼の 1880 年のプーシキン演説を決して肯定的に受け入れず、その演説内で提起された「最も簡単な問いに対する答えすら、ドストエフスキーのメッセージの中にはない」と言い切った。

今回、夏と冬の二回に渡ってスラブ研究センターを訪問し（2010 年 7 月 16～18 日、12 月 16～18 日）、付属図書館とセンター図書室にて資料収集を行うことによって、申請者が有していた資料をかなり補完することができた。それら集めた資料の中でも特に興味深かったのは、ミハイロフスキーとローザノフの、ドストエフスキー評価をめぐる一連の論争である（これには、その後に両者間でやり取りされた書簡の記録内容も含む）。1890 年代の『モスクワ通報』や『ロシア思想』、『ヨーロッパ通報』、『ロシアの富』の諸雑誌をたどって彼らの間の論争の全貌を追い、また、それを補足する形で、ローザノフの著書を幾つか収集することができた。この論争には、ウスペンスキーも若干関与しているようである。

収集した資料すべてをまだ読み終えていないが、これらの成果をまとめ、『ロシア思想史研究』に来年以降発表する予定である。欲しかった資料の幾つかは手に入らなかったが、必要なものは入手することができた。本館書庫、スラブ研究センター図書室の蔵書の質と量に改めて驚嘆し、また、丁寧なスタッフによる研究環境・設備の良さに感服する日々であった。